

揺らぎの中の英語教育・序章

— 受ける側からの発信 —

はじめに

一九九六年二月、学年度末試験の準備に忙しいすべての一橋大学二年生の郵便受けに、三枚のアンケート用紙の入った封筒が舞い込んだ。突然の、しかも誤解を招くようなアンケート用紙であったにもかかわらず、学生諸君はこの迷惑な闖入者の問いかけに、誠意をもって丁寧に応えてくれた。いくつかの返答には、たとえば次のような手紙が添えられていた。

「私が思いますに、大学で提供していただきたいと思う英語の授業はアウトプット型の授業です。インプット

塚 田 富 治
石 塚 幸 太 郎
田 中 大 二 郎

は中学・高校時代になかば強制的に勉強してきたのに、それらの単語なり、熟語、英文法等をアウトプットする事なく、しだいに忘れてしまうという状況に陥っています。そういう意味では、会話の授業は非常に有用で思ったとおりにあります。また私事で恐縮ですが、中高時代に英語落ちこぼれであった私にとって、英語とは『興味はあるけれど少し構えてから取り組む』といったものであり、身近に感じるものがなかなかできるものではありませんでした。

そういうことで私は英語を身近に感じられる授業を望んでおります。実際、後期のセミナーでは英文のテキ

ストを大量に読みこなしてゆく作業が行われると思いません。(身近だとか身近ではないというレベルではないですね。)その点を現在私は不安に感じており、一・二年次にもう少しきちんと英語を学んでおけばよかったとも思っています。

別の手紙には大学における英語教育にたいする率直な批判が盛り込まれていた。

「大学で学ぶ学生は、その興味・関心を問わず『英語』科目を一律に勉強する必要があるのだろうか。こういった疑問をもつ学生はわたし一人ではないと思うのだが、それを考慮するでもなく『英語教育』なるものを全学生に強要する現在の制度の強化に向かう英語科の姿勢に疑問を抱いている。大学教育の中の語学教育の在り方、語学教育の中の特に英語教育の在り方、などをもう一度検討する必要があると思う。『国際』という実態の希薄な言葉の圧力を受けて、社会の構成員全員が英語の運用能力を身につければ事の解決に向かうという風潮が強い。小学校への英語教育導入がその典型である。このような時期だからこそ、大学で『英語』のみならず『外国語』と『日本語』と『日本にくらすわたしたち』の関係を考

えていかなければならないのではないだろうか」。

アンケート調査に責任をもつ筆者は、これらの投げ返された問いかけにたいして、同じように誠意をもって応えなければならぬと強く感じた。以下の小論はそうした応答の試みの一つである。

1 問題の設定

——なぜ英語の力は

低下し続けているのか——

一橋大学の学生の英語力の低下が指摘されるようになってから、すでに久しい。その指摘の多くは専門教育を担当する教官や実業界で活躍し指導的な役割を果たしている一橋大学の卒業生からのものである。「ゼミナールで使う英文の文献を近ごろの学生は満足に読むこともできない」、「海外から送られてくる英語の文書を理解できず、的確に翻訳もできない」などの指摘が、教授会や大学教育にかかわる各種の委員会で、あるいは『如水会報』や一橋大学卒業の財界人の集まりなどで繰り返し返されてきた。

こうした指摘は多くの場合、大学における英語教育の

問題点の指摘とセットになっていた。「講読中心の、しかも文学作品をテキストとする一橋大学の英語教育は、学生の学習意欲を減退させ、英語離れを促進させている。その結果が英語力の低下である」と、多くの批判者は結論づけるのである。

まったく専門を異にしながら英語教育を担当している筆者もまた、学生の英語力の低下を教育の現場において実感している。行間を読んだり、長文の要旨をまとめるという高度な作業はいうにおよばず、コンテキストを考慮したうえで適切に単語の意味を把握し、さらに構文を正しく理解したうえで、英文を正しい日本語に翻訳するという、基本的な作業も多くの学生は満足にやりこなせずにいる。そうした学生とともに日々、英語を学んでいる者たちは、おそらく誰よりもよく、細かな点にまでわたって学生の英語力の低下を把握しているであろう。

その一人として、筆者は英語力の低下の原因が大学における英語教育の拙劣さにあるという指摘に、すぐには与することができない。大学で学ぶために必要とされる基本的な学力、あるいは予備知識が決定的に不足しているという事実は、なにも英語の領域に限ったことではな

い。筆者が専門とする、「政治学や歴史学を学ぶためには不可欠の基礎的な知識を今の学生は持ち合わせていない」という嘆きの声は、一橋大学の教官の間からばかりでなく、他大学の研究仲間からもしばしば聞こえてくる。大学で学ぶために必要な基礎学力の低下は、あらゆる学問領域にまたがる普遍的な現象とみるべきなのである。その意味で上記の英語教育への批判は、すこしばかり軽率な、あるいは偏見に囚われた判断にもとづくものといえるであろう。

大学における英語教育を考えるためには、それゆえにまず、大学入学以前の学生の状態、そして大学での英語のクラス受講以前の学生の意識、態度を明らかにすることから始めなければならない。大学で学ぼうとする者が当然もっているであろうと、これまでは暗黙の前提となっていた基本的な知識の欠落が、あらゆる学問領域にみられることを考えるならば、こうした調査・研究は、英語教育にかぎらず、教養教育、専門教育の両方において貴重な資料を提供することになるはずである。

ところで大学入学以前、すなわち中等教育における英語の授業数の削減と英語教育の変質が、高校生あるいは

受験生の英語力にどのような影響を与えたかについては、すでにいくつかの指摘や調査が存在する。それらの中で一致して指摘されているのは、中学校と高等学校における英語の授業時間の削減が、習得英語単語数の減少や、高度ではあるが習得が望まれる文法の未習得をもたらし、ていることである。大学入学以前の問題については、大学における英語教育を批判するものが見落としがちなこの重要な事実の指摘に止めておく。

本稿において筆者が問題とするのは、従来必ずしも本格的な調査の対象とはならなかった大学生の英語クラス受講以前の英語そのものについて意識、態度、そして大学における英語教育にたいする意識、態度である。幸いなことに筆者の前には一九九七年二月に実施されたアンケートがある。それは一年生については一〇〇パーセント、二年生についてはおよそ六五パーセントの回収率をほこる、きわめて信頼度の高い資料である。およそ二〇〇〇枚、段ボール箱二箱分の資料にもとづいて、これからの叙述は進められて行く。

本章の最後に、筆者がここで用いる方法について簡単に触れておこう。筆者は社会調査の専門家でも、また統

計学を研究する者でもない。それゆえに正道からは少しはずれられるかもしれないが、ここでは筆者が専門とする思想史の方法を用いて論述を進めていくことにする。思想史とはテキストの解説を中心に進められる学問である。その解説は感情のない機械ではなく、さまざまな偏見や先入観にとりつかれた生身の人間によって行われる。およそ二〇〇〇枚のアンケート用紙というテキストの解説はそれゆえ、かならずしも客観的で公平なものとはならないかもしれない。しかし本稿は、「はじめに」に引用した学生からの真摯なアンケートにたいする回答へ向けられたダイアログの始まりでもある。社会調査や統計学の観点から、あるいは調査の対象である当事者としての学生の立場から、筆者の解説とは異なる、あるいは真っ向から対立する解説も可能であろう。あらかじめ、積極的な批判や反論を期待して、本論に入ることにしよう。

2 学生の英語意識

——なぜ、どのように英語に

接するのか?——

一橋大学で英語教育を担当する教官たち(以後、英語

エリア・グループと呼ぶ)は、大学全体のカリキュラム改革の一環として、英語必修コマ数を四コマから二コマに半減する改革案を大激論の末に採用した。改革反対の主張は、必修コマ数の半減は教育効果の半減となり、学生の英語力は半減するという明確な算術的な論拠にもとづくものであった。これにたいして賛成の論拠は、選択の自由度を増やして学生の学習意欲を喚起する一方で、半減したクラスで密度の濃い、集中力を必要とする授業を行うことで、半減した分を補うだけの教育効果を上げるといふものであった。こうした議論を踏まえて英語エリア・グループは、クラス制必修英語の講義の内容を大幅に変更し、評価の客観性と学生の関心の多様性に応えるために、夏学期と冬学期にそれぞれ異なる担当教官、テキストを振り当てることとした。また学生が英語に接する時間を多くもち、かつ設定された目標に到達できるように、自習用テキストを指定し、独自の英単語集を作成した。さらに学生の英語力をより客観的に評価するために統一テストを実施し、一層の学習を必要とする学生のために再履修クラスを設けた。クラス制以外の英語の講義についても選択肢を増やし、ネイティヴ・スピーカ

ーによる英語の講義の聴講能力を育成するためのクラスなど、個性的な講義を用意したのであった。

さらに、これらの改革の一環として英語エリア・グループでは、英語クラスの受講生が英語そのものについて、また大学における英語教育についてどのような意識、態度、意見をもっているのかを、アンケートによって調査し、その結果にもとづいて改革の推進、あるいは修正を計ることとした。アンケートは一年生にたいしては、統一試験の実施時におこなわれ、受験者全員からの回答をうることができた。また二年生にたいしては、郵送によってアンケート用紙を配付し、回答を求めたが、回答率は六〇パーセントをこす非常に高いものであった。これらの貴重なテキストを、すでに述べたように思想史の方法を用いて、集計・分析することで、英語教育の改善のために役立つデータが提供されるばかりでなく、異文化としての英語に向かう(あるいは向かわない)現代の大学生の内面世界もまた明らかになるかもしれない。

さて一橋大学の学生は、基本的にどのような態度で異文化としての英語に向かい、どのような動機から英語を学んでいるのであろうか。「英語は好きですか、嫌いで

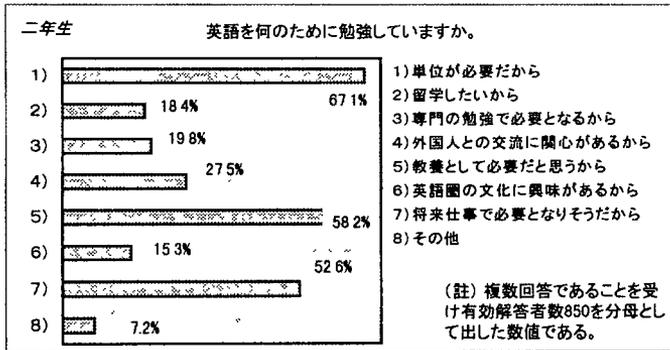
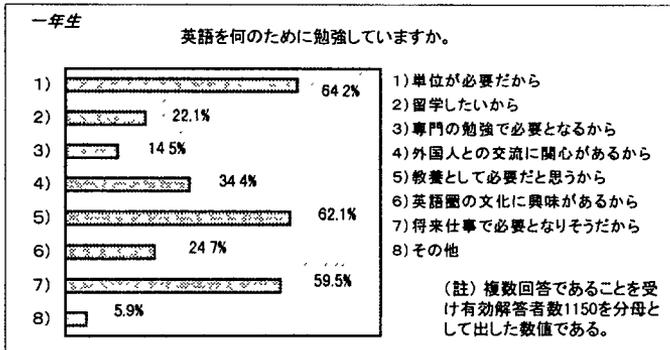
すか」という問いにたいして、一年生、二年生ともに八〇パーセント近くが「好き」と応えている。大学における英語教育にたいする学生の反応は後で詳しくみるとして、これだけから判断するならば英語教育が英語嫌いを生み出すということにはならないだろう。

それでは好きな英語を、学生たちはどのような動機から学ぼうとするのであろうか。複数回答を認めたアンケートからは、一年生の六四・二パーセントと二年生の六七・一パーセントが単位取得のために、いわばオブリゲーションとして英語に接していることが分かる。次いで多いのは「教養として必要と思うから」について一年生の六二・一パーセント、二年生の五八・二パーセント、「将来仕事で必要となりそうだから」について一年生の五九・五パーセント、二年生の五二・六パーセントである。「教養のために」、また「将来の仕事のために」に英語を学ぶという積極的な姿勢が、進級するにつれて後退しているのは気になるが、学生の半分以上にみられるのはきわめて喜ばしいことである。図表①が示すように、そのほかにも積極的な動機から学生たちが接しようとしている。

しかし問題は「教養のために」、また「将来の仕事のために」学生がどのような方法で英語を学ぼうとしているかである。「大学の英語のクラス以外で英語の勉強をしていますか」という問いにたいする回答は、「している」が一年生では三五・五パーセントで、学生全体のおよそ三分の一にすぎない。好意的に解釈すれば、学生たちは大学における英語教育をきわめて高く評価し、それだけで「教養としての英語」も、「将来の仕事に役立つ英語」も習得できると考えていると言えるのかもしれない。⁽²⁾とはいえ後でもみるように、学生たちの大学における英語教育への評価はかならずしも高くはない。だとすれば、「教養として必要と思う」、「将来仕事で必要になりそうだから」という回答は建前の表向きの回答であり、「単位が必要だから」というのが、実は学生たちの本音なのかもしれない。「単位が必要だから」という回答と「大学の英語のクラス以外で英語の勉強をしていない」という回答の割合が、それぞれ六四・二パーセント、六四・五パーセントときわめて近似しているのは、この推測を裏付けているようにも思える。

図表②からは、「大学の英語のクラス以外でも英語の

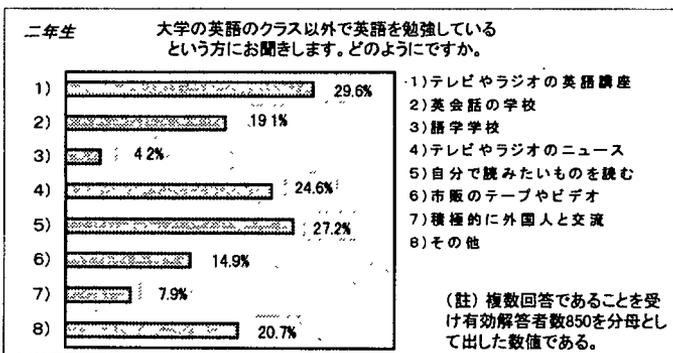
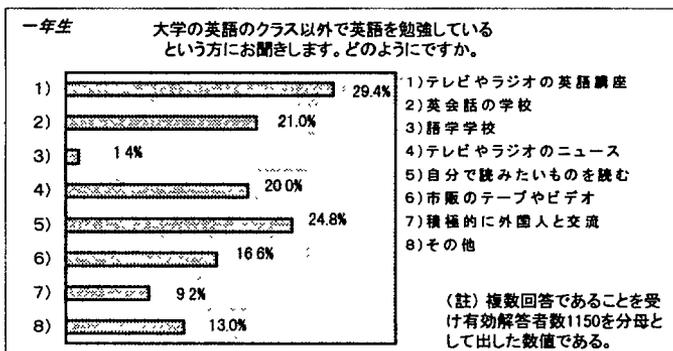
図表 1



勉強をしている」学生は、多様な方法で英語を習得しようとしていることが分かるであろう。

英語に限らず、すべての学問分野についていえることであろうが、学問は高貴な動機につき動かされて始められるというよりも、卑俗な必要に迫られて始められるという側面がある。どのように卑俗なものであれ、必要に迫られて始められた学問は長続きし、一定の成果を収める。それでは一橋大学の学生は、単位を取得しなければならぬという差し迫った必要以外に、英語を学ぶ必要に迫られたことはあるのだろうか。「普段の生活の中で、英語の必要を痛感したことがありますか」という問いにたいする回答は、一年生では「ない」が五九・七パーセントである。一方一年生に較べて活動範囲が広がり、さまざまな体験をするようになるからであろうか、二年生では「ない」

図表 2

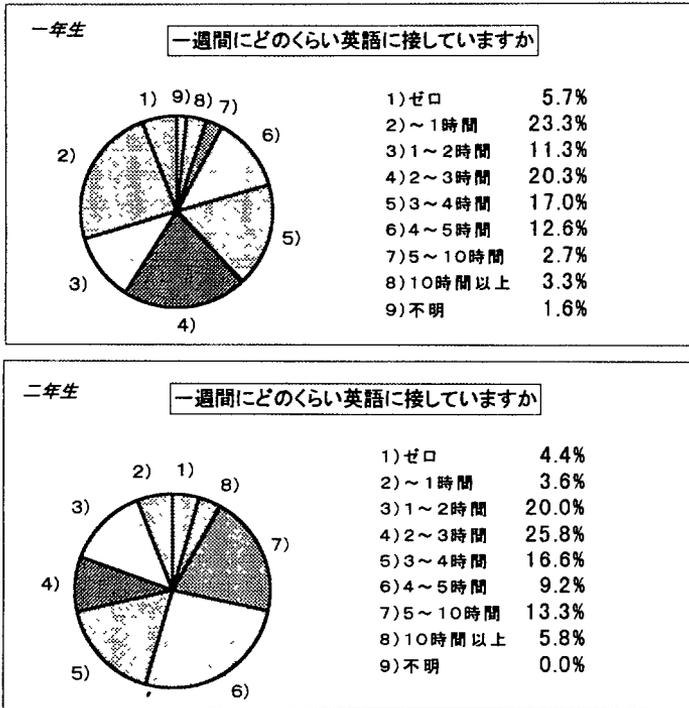


が五四パーセントとなる。学生たちの英語にたいする学習意欲が低い原因の一つは、単位取得以外にさしあたり英語学習の必要に迫られることがないということにもあるのではないだろうか。

ところで任意に記述してもらった、「どんなときに、英語の必要を痛感したことがありますか。具体的に伝えてください」という問いへの回答について、いくつかの傾向を紹介しておこう。おそらくいつの時代にもみられるにちがいない、古典的な例は「外国人に道を聞かれて、答えられなかった」、「外国人との交通で困った」、「パーティで外国人とうまく交流できなかった」、「そして学生の海外渡航の機会が増加した」と関連して「海外旅行で不便を感じた」などである。

新しい傾向としては、流通の国際化やパソコンによるインターネットの普及と関連してであろうか、英文で書かれた商

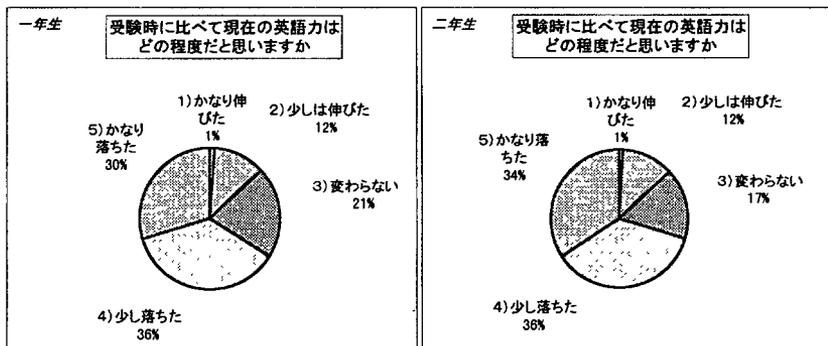
図表 3



品のカatalogや説明書が簡単に理解できないことや、英文のインターネット上の情報を読めないことなどが、英語の必要性を感じた理由にあげられていた。以上のようにさまざまな必要に迫られた学生たちの多くは、大学のクラス以外でも英語を学ぶようになっていったにちがいない。

さてこれまでの分析によって一橋大学の学生の多数は、単位を取るだけのために、大学の英語クラス以外ではほとんど英語を勉強しない「省エネ型勉強法」に従っていることが明らかとなった。これは「一週間にどのくらい英語に接していますか」にたいする図表③の回答結果によっても補強されるであろう。語学学習が日々繰り返し反復されるドリルによってもっとも効果的になされることを考えるならば、「一週間五時間以内の英語との接触は、「省エネ型勉強法」といっても

図表 4



よいだろ⁽³⁾。

こうした勉強法はどのような結果をもたらすのであろうか。図表④でその結果は一目瞭然である。一年間の大学での英語学習の結果、英語力が増加したと自己評価する者は、およそ一三パーセントにすぎず、三分の二以上の学生が、英語力の低下を認めざるをえないのである。また二年生については、七〇パーセントが英語力の低下を訴えている。

一橋大学の学生の英語力の低下の原因が、学生の側の英語それ自体にたいする意識や態度、取り組み方にあると言わざるをえないような分析結果をこれまでのところ、われわれは手にすることができた。もちろんこれだけが、主要な原因というわけではない。次章で明らかにするように、英語を教える側の問題や、教えるための仕組みなども、大きな原因となっていることは言うまでもない。しかし教育においては、教育を与える側と教育を受ける側の相互作用に、その成果が依存することを考えるならば、教育を受ける側を中心とした以上の分析結果は、偏見なしにまず第一に考慮すべきことであろう。

3 大学における英語教育への疑問

——クラスはうまく

機能しているのだろうか——

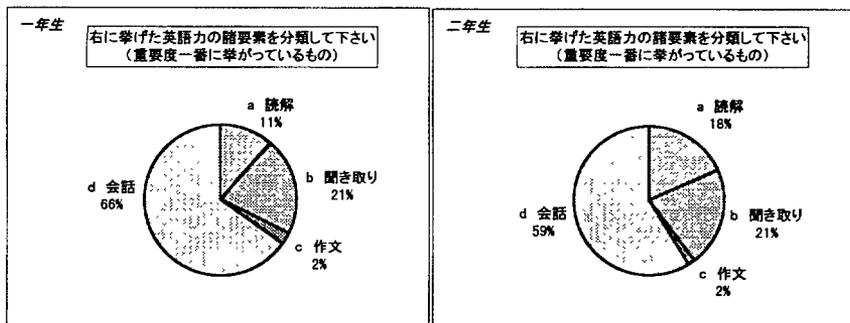
この章も学生からの批判もしくは助言の手紙の紹介から始めることにしよう。

「僕は一橋を含めて、今の英語教育に非常に疑問に思うことがある。まず一番に言いたいのは、多くの一橋生あるいは大学生が、大学に入って失望することの一つは、英語の授業の在り方だと思う。今までさんざん難解な英米文学の読解をやってきて、大学に入ったらまた同じことの繰り返し。確かに大学は、アカデミックな所をやる場所ではあるが、英語には「*know*」の面が多分にある。実際多くの一橋生が後々必要なのはその面であろう。それなのに、大学に入ってやらされるのは、実際に役に立たないものが多い。実際、多くの一橋生が英語の *speaking* や *listening* が全くできないまま、社会に出ているのではないでしょう。但し、実際問題としては、結局は個人の問題だと思う。大学の英語の授業はせいぜい週二回位だから、後は個人の問題だと思う。僕も通じる

English を身につけるための方法論等をよく考えることがある」。

一橋大学の学生は、文学関係の作品であれ、新聞や雑誌の記事であれ、また社会科学関係のエッセイであれ、英文の読解を嫌い、もしくはこれまでにもう十分勉強してきたからにはや必要ないと思っているようである。必修として課せられる英語 I のクラスが「精読になっていること」について、「納得できない」が三三パーセントで「納得できる」の二六パーセントを上回っている。英文読解の軽視は、英語学習の中で「何がもっとも重要か」という問いにたいする回答結果、図表⑤からもはっきりとうかがうことができる。読解は一年生で一パーセント、二年生で一八パーセントと下位に甘んじているのである。その理由の一つは、学生たちはもはや十分に読解力を身につけていると思っ込んでいることにあるのだろう。英語学習の中で、「もっとも苦手なのは何か」という問いにたいして、読解と応えた者は全体のわずか六パーセントにすぎない。次の学生からの要望が端的に示すように、学生の本心などが読解力は十分についており、もはや学ぶ必要などないと考えているのである。

図表 5



「学生たちは所謂『受験』を通過して来ているのだから、読解力については皆そこそこ力をもっていると思います。最近はずいぶん変わってきているようですが、高校までの英語の授業は、大学入試に合格するための読解と推敲を重ねたうえでの英作文に占められていました。もちろん社会に出てからも読解の力は求められますが、それ以上に英語での会話、特に自分の意見を的確かつスムーズに述べられる能力が必要とされるのではないのでしょうか。」

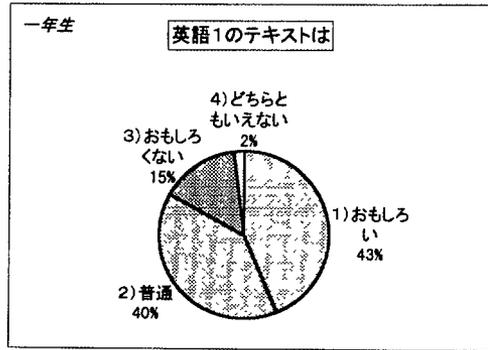
読解クラスに代わるものとして、学生たちが求めるのは英会話のクラスである。必修クラスが英文読解であることに納得できない、と答えた学生の八〇パーセント近くが、必修クラスで英会話を学ぶことを望んでいる。

とはいえ学生たちは必修クラスでの英語教育にたいして全面的な不満をもっているわけではない。英語Iのテキストにたいする評価は図表⑥が示すように、おおむね良好である。また英語教育カリキュラム改革の一環として採用した、一年を夏学期と冬学期に分けて、担当教官とテキストを変える仕組みについても、図表⑦と⑧が示すように、好意的に受け入れられているといつてよいで

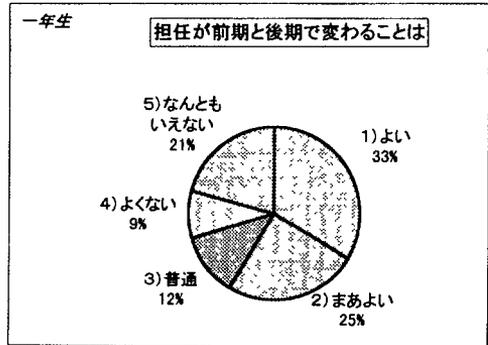
あろう。
 ここでとりわけ注目してよいのは、専門を担当する教官の一部で定説化している「学生は小説や詩などの文学作品よりも、専門としての社会科学と関係ある英文を読みたがっている」、「すきでもない文学作品を読ませることが、英語離れを促し、英語力の低下を招く」という意見がデータによって臆見であることが証明されたことである。「小説と論説のどちらに関心をもちますか」と

いう問いにたいして、一年生の六〇パーセント、二年生の四五パーセントが小説に関心をもつと答えている。さらにサブテキストについても、昨年度採用した短編小説集について、五七・二パーセントがおもしろかったと答え、また七〇パーセントの学生がサブテキストは小説がよいと答えている。統計的に見て、学生たちは英語で文学作品を読むことをかならずしも嫌ってはいないようなのである。

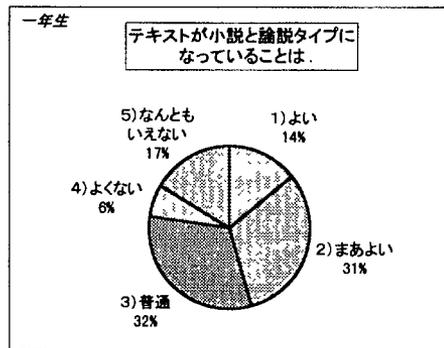
図表 6



図表 7



図表 8



以上のような数字で表される結果だけで、集計・分析を終えたとするのは、妥当ではない。アンケート用紙のいくつかには、統計からはみ出るような生の声が盛り込まれていたからである。そしてその多くが筆者自身への教師としての質を疑問視するような叱責の声から、一橋大学の英語教育全般にたいする真摯な批判にいたるまで、ありとあらゆる種類の、時に怨念やうめき声にも似た、批判の声であった。そのいくつかを紹介し、筆者なりにその批判に答えることなしには、アンケートの実施そのものが無意味となるであろう。

もっとも多い批判は、すでにその幾つかを見てきたように、読解あるいは精読中心の英語教育にたいする次のような批判である。「ある程度英語をやってきた者に、また高校と同じことをさせるのはせっかくな大学に入った意味がない」。「あれだけ中・高六年間の英語教育が批判されていて、コミュニケーションの重要さが強調されているのに、大学に入ってもやはりそれは変わらない」。さらに学生たちは必修というかたちで、語学を強制されることになんて著しい拒否反応を示す。「勉強は自分

の意志でやるもの。単位で人に強制的にやらせるものではない。現行の教育制度にそもその問題があるが、どうせクラス制にするならば、自分でやっている英語の勉強の質問に答えてくれるだけでいい。僕らにない知識や経験、世界(英語に関する)をみせてくれるだけのことが理想」。「英語も含めて語学を必修にする必要があるのか、と思う。英語を取りたい人は週三、四コマ取れ、必要としない人は、全く取らなくて済むシステムにすればいいと思う」。

こうした観点からは、統一テストや単語集にたいする批判が全面的に展開される。「なぜこのようなものを全学生に強制的にやらせるのか、まったくわからない。大学は自分の学びたいことを学ぶところで、他人に強制されてするところではない。また、自分の専門分野を切り開く場でもある。だからこそカリキュラム改革が行われたのだと思うが、英語のこの変革は全学的な流れに逆らうものだ。統一テストは案の定、センター試験の延長のよう、何の目新しさも感じられない。大学に入ってまで、なぜ入試まがいのものをしなければならぬのか理解に苦しむ。今後廃止されることを強く望む」。「統一試

験は学生の英語力の低下を憂いての処置と聞くが、英語力の低下は受験勉強での詰め込み式の学習の反動である。それなのに再び学生に詰め込み式の学習を要求するのは納得がいかない。

ちなみに統一テストを受けた九〇パーセント以上の学生が二度と「統一テストは受けたくない」と答えている。一方単語集については、評価する者は二・四パーセントにすぎない。興味深いのは「英語を学ぶとき、どんな点が難しいと感じますか」という問いにたいして、「知らない単語が多い」と答えた学生が全体の六〇パーセントにも達していることである。自らの病状を自覚しながらも、苦い薬は厭だという、わがままな病人に学生たちをたとえるのは、やはり行き過ぎであろうか。

むすび——ダイアログの始まり

一つの価値観や理念にもとづいて、一つの目的を実現するために、まっしぐらに突き進むという教育の時代は終わった。そうした教育が求められる時代はまたいつか、来るかもしれない。しかし揺らぎの時代ともいえる現代においては、さしあたりそうした教育を求めることは危

険なことといえるだろう。かくして政治と同じように、教育もまた、とりわけ制度という一定の枠組みの中で行われる教育は、価値観や利害関心の異なる多数の人々を対象として、限られた資源を用いて、一定のミニマムな目的を実現することを目指すざるをえなくなる。

教育の目的は、政治におけるように多数の人々の平和的な共存にとどまるのではなく、教育を与える側、教育を受ける側、さらに社会や国が求める要求を可能な限り実現することにある。ところが、この三者の要求はそれぞれに単一ではなく、それぞれのうちにも異なる要求が存在する。このように無限に微分化する可能性のある多様な要求をすべて満たすことは、大学内・外の政治の結果として利用できる資源が限られている場合には、およそ不可能である。こうして教育の現場においても、政治におけると同じように諸要求の間に調停と妥協が試みられ、それぞれの要求に共通する、しかも最低限の要求に目的を限定せざるをえなくなる。英語教育について、具体的にいうならば、「教養としての英語」、あるいは「将来の仕事のために役立つ英語」を身につけることができるための、さらには各人が英語の学習を通してそれ

それ目指す多様な目的を実現するための、基礎的な英語力を養成することが英語教育の目標とならざるをえない。おそらく現代、制度の中で行われている教育のほとんどがそうであるように、一橋大学の英語教育もまたこうした窮屈な状況に直面しているのである。

改革の選択肢として、英語エリア・グループは、強制を嫌う自主独立の学生が強く希望するような、必修という枠組みすらをも取り払った自由な選択をも考えない訳ではなかった。しかし単位を取ることだけを主要な動機とし、単語力のなさを自覚しながらも、すでに十分に読解はマスターしていると思ひ込み、大学のクラス以外ではほとんど英語に接することすらない多くの学生たちに、自習用のサブテキストや単語集はもとより、強制的な必修クラスも、受験勉強の延長であるような統一テストも廃止し、多くの場合予習も、復習も必要としない英会話のクラスだけを提供したら、学生たちの英語の力はどのようなになるのであろうか。いくつかの要求を無視して、こうした方向への改革という大冒険をするほどに、英語エリア・グループは予想される結果について楽観的ではなかったのである。

ふだん教室の中では羊のようにおとなしい物言わぬ学生たちからの、思いもかけぬ発信は、ときには痛みをも伴うものではあったが、きわめて有益な刺激であった。数多くの批判を十分に検討したうえで、一橋大学の英語教育はさらに充実したものとしていかなければならない。そうした方向への出発点として、筆者を数少ない学生からの、これから大学において英語を学ぼうとする新入生にたいする助言を、大学を構成するすべての者の間で共通理解とすべきではないだろうかと考えるのである。「大学の英語の授業プラス自分なりの勉強という方式で英語を身につけて欲しい。大学の授業だけではあまりにも英語に接する時間が少ないので。また受動的な気持ちで授業には臨まないこと」。「授業だけでの英語力の向上はないと思うてよい。授業はあくまで自分の勉強の足掛かりとなるのだから。授業だけに頼らず、自分で勝手に勉強してください」。

〔付記〕 本論文はカリキュラム改革調査研究経費を使ってのアンケート調査によってもたらされたデータにもとづいて執筆されたものである。アンケートの作成、データの集

計・分析は石塚、田中が担当し、それについて塚田を含めた三人で議論し、その結果を塚田が本文で執筆した。データの解釈、また論述における表現については塚田が一切の責任を負っている。

アンケートの集計を手伝ってくれた一橋大学言語社会研究科の院生の皆さん、また反省すべき点の多いアンケートに答えてくれた学生の皆さんにこの場を借りて、感謝の意を表したいと思います。「本当にありがとうございます」。

(1) こうした批判はわが国において英語教育が開始された時点からすでに存在していた。たとえば国文学者で東京大学教授の藤村作は昭和初期に「何年も英語を学んだが、いっしょう役に立たない」ことを指摘し、次のように批判している。「英語一通りの読解は出来ず、手紙その他の文書は綴れず、英語国民との会話も出来ない」。(市河三喜監修

『英語教授法事典』一九七八年、開拓社、八〇頁)

(2) 大学での英語教育を二倍経験した二年生の四七パーセントが、大学の英語クラス以外でも、英語の勉強をしているのは、かれらが大学での英語のクラスでの授業に限界を感じているからなのかもしれない。

(3) 現在の大学の一・二年にあたる戦前の高等学校では第一外国語に週八〜九時間(文科)、六〜八時間(理科)の時間が割り当てられていた。学生はこの授業時間以外に、それとほぼ匹敵する予習時間をもっていたとするならば、現在の学生の英語に接する時間の短さは、英語教育にとって致命的な状態といえるであろう。

(一橋大学教授)

(一橋大学大学院修士課程)

(一橋大学大学院修士課程)